

日本人の境界を問い直す

小熊 英一さん

一八六九年に蝦夷(えぞ)島を北海道と改称、七九年に琉球王国を廃止して沖縄県を設置、九五年に台湾割譲、一九一〇年に韓国併合…。敗戦ですべての植民地を失い、沖縄は米軍に占領された。明治から昭和にかけて、日本は国境線を大きく伸縮させてきた。

近代日本が国民国家を形成した過程で「日本人の範囲」がどのように決定されたのかを問い直し、「日本人」の境界(新曜社)にまとめた慶

応義塾大学教員の小熊英一さんは「大半の日本人にとって『日本人の境界』とは心の迷いであり、マ

うえ〜ぶ 98

イノリティーにとつては、災厄とある種の悲しい希望だった」と分析する。

近代日本が国民国家を形成した過程で「日本人の範囲」がどのように決定されたのかを問い直し、「日本人」の境界(新曜社)にまとめた慶



題を追ううちに、社会全体の在り方を学問的に問い詰めてみたいと思っただ」からだ。

「日本人の境界」がどのように決められたのかを克明に調べ、博士論文を書いた。「当時の政府は沖縄やアイヌの人々について

「どこまでを日本人にすれば軍事上、役に立つか」という程度にしか考えていなかった。省庁間の権限争いなども絡み理念や一貫した政策と呼べるものもほとんどなかった」

あがいた日本は「植民地に対して天皇制と日本語くらいしか提示できなかった。境界線上の人々の中には同化政策と圧政に苦しめられ「せめて『日本人』になれば人間として生きられるのではないかと追いつめられた人もいた」という。では、そういう日本とは何か、日本人とは何だったのか。

「敗戦直後、日本人の中心にいて境界を決定していた政府首脳はほとんどが戦争責任を否定した。それなら日本人と呼べる人間の中心とは何なのか、という問いの答えは、まだ見つからない」